

新潟県の農業高校に未来はあるか

— どのような農業高校、どうする農業高校 —

内山 雄平

一、はじめに

県内の農業高校は、現在、単独農業高校が八校、農業科と他学科との併置校が二校、合わせて十校で、ここで学ぶ生徒は、四、八一〇人である（九六年五月）。当然のことながら、農業高校の果たす役割は、地域農業を支え、発展させる後継者を養成するところに本来の使命があることはいうまでもない。しかし現実はどうだろうか。

全国の新規学卒者の就農者は一、七〇〇人で、うち四〇〇人は、農業高校の卒業生（九二年度）。新潟県

の場合は九十九人で、内、高校卒は六十三人とごくわずかである（九五年度）。

農林水産省が九二年六月に公表した「新しい食料・農業・農村政策の方向」を受け、農政審議会は、九三年一月に「経営感覚に優れた効率的かつ安定的な経営体が、農業生産の太平を担う農業構造を確立していくこと」を明らかにした。それによると、従来の自立農家の育成に代わって、多様な経営体の育成に変更され、経営の法人化を強調している。

新潟県の基本構想による認定農業者は、一二、四七六経営体で、農業従事者の養成および確保は一人必

要としてゐる。

このような県内の農業情勢のなかで、農業高校が将来の農業後継者を養成する教育機関として機能していない現実には、現場の農業教師の悩みは深い。と同時に、授業中のおしゃべり等で学習が成立しなかったり、生徒の喫煙やバイク等の生活指導に追われる毎日に、頭を悩ましているといつてよい。

だが、農業教師たちは、このような教育現場に逡巡しているわけではない。ここでは、こうした農業高校の教育状況をなんとか打開しようと、これまで私が関わった新発田農高における試みと、十日町総合高校の総合学科と農業教育との関わりにふれながら、新潟県における農業高校の現状と在り方について考えてみたい。

二、生徒の希望を生かす学科統合のとりくみ

——新発田農高の試み——

(1) 何故、取り組んだか

新発田農高の試みとは、九〇年〜九二年、校内に「基本問題検討委員会」を設置し、今後の単独農業高校としての将来構想を明らかにした取り組みである。

この背景には、将来農業をやってみようとする生徒や、農業に興味・関心が深くて入学する生徒が従来より一段と少なくなり、むしろ、能力主義によって差別・選別されて入学する傾向が強まっていた。こうした生徒にどのような教育内容を展開すれば、たとえ入学当時農業にそっぽを向いている生徒でも、学年を経るに従い関心を示し、農業後継者はもちろん、農業関連産業を含めた進路を切り開ける生徒に育てられるかが、第一の課題となっていた。

第二には、中学校の成績で振り分けられる生徒にとって、入学した科が「どんなことを学ぶのか、なぜこの教科を勉強するのか」分からない生徒が少なくなき、さらに学科間の学力格差があり、このランク意識が子供たちの心をゆがめ、不登校・中退者が特定の科に集中していること。

第三には、九四年の教育課程の改訂にともなって、教科内容や科目が大きく変更されたこととあいまって、既学科である農業・農業経済・園芸・畜産・食品学科・生活の各科の編成がそのままではいかどうかを検討する必要性に迫られていたこと、などである。

なお、九〇年当時の学科編成は、農業科一、農業経

済科一、園芸科一、畜産科一、食品科学科一、生活科
一で、八四〇人の生徒数。

(2) 何からどう着手したか

基本問題検討委員会は、教頭、教務、普通科・農業科・生活科の各教諭から構成され、九〇年十月〜九二年十一月までの二カ年に渡って、本校生徒の実態や地域における本校の役割を明らかにしながら、本校の将来像について討議が積み重ねられた。

最初に手掛けたのは、本校に入学してくる生徒の学習・生活・進路状況について、その動向を詳しくみるために、学力調査（七五年〜九一年）、生活指導で特別指導を受けた内容と件数（七九年〜九一年）、中退者の数とその理由（七九年〜九一年）、進路動向（七〇年〜九二年）および生徒の保護者の職業の推移（七五年〜九二年）について、それぞれ年次別に調査・分析を始めた。

これらの調査の結果、明らかにになったことは、学力について：国語・社会等の教科は、県の平均的なレベルを維持し、数学・英語の教科には、その差がみられ、全体として学力差が大きいこと。

中退者について：中途退学者は、少ない年で九人、

最高で二十八人となっており、中退した主な理由を見ると、生徒指導（約二割）より学習不振（約四割）によってやめる生徒が多いこと。

進路について：農業自営者は七〇年（六割）から七七年（一割）にかけ急速に落ち込み、他産業への就職者が増大し、最近は一進業者が増えつつあること。

保護者の職業：八〇年と九〇年とで、農家と非農家の割合が逆転し、非農家出身が六割を占めていること。

さらに、本校生徒の現実の姿について、それぞれの検討委員が授業・実習・クラス経営・クラブ・学校行事等を担当するなかで、日頃の思いを赤裸々に語り合うことにした（一般的に同じ職場内の高校教師が、お互いの実践を率直に語るには、相当な勇気が必要とする。お互いの恥部をさらけ出しても、それを認め合い、安心して話せる雰囲気、長期間にわたる検討委員会の継続を可能にした）。

以下の内容によって、現在新潟県の農業高校が抱えている問題の一部が理解されると思う。

〈生徒の学習意欲について〉

生徒の学習態度：授業中の遠慮もなく続く私語、勉強は分からなければ、分からないでよいと思っている。

勉強させない学校、だからしくとも良いと受け止めている傾向がある。しかし、入学時、「中」程度でも卒業時に四年制大学や国家公務員に合格する生徒もおり、クラブ活動に熱心な生徒は勉強にも意欲的である。

教師の対応…この程度の学力だから、このレベルの授業内容とする展開は、逆に生徒の学習意欲を削ぐことになり、「生徒のやる気と学力」を伸ばさずにいるのではないか。

〈生徒の進路について〉

生徒の意識…生徒は、中学校段階で自分に進路について自覚させられないで入学してきている。自分の進路を自覚しない生徒は努力せずに、今の自分の力に合う就職先で進路を決めてしまう。

教師の対応…進学・公務員・就職などの進路指導は、生徒任せになっているきらいがある。学年の組織的な取り組みも少ない。特に、生徒の農業に対する関心を高めるための手だて——例えば、地域農業の見学・研修の機会が少ない。

〈生徒の自主・自立について〉

生徒の行動…リーダーとして訓練されてくる生徒は少なく、学校行事などの計画についてクラスの討議が

成立しない。清掃も教師が指示しないと動かない。

教師の対応…生徒が自発的に動かないから、教師主導の諸行事を組んでしまう。HR活動は、服装検査・全校集会に利用され、本来の自主・自治的能力を養成する場となっていない。

以上のような実態調査と分析をふまえ、これからの新発田農業高校の在り方について改革案が練られた。なお、当面の課題となっている授業・進路・生徒会活動に対する改善については、将来的な構想と切り離し、ここでは直接触れないことにする。

(3) 農業教育の在り方と学科改編について

本校の教育課程編成は、従来から普通教科の学力を重視し、普通科目の総単位数を減じないで、農業科目の単位数を減らしてきた(七三改訂時の単位数は普通科目…農業科目Ⅱ五三・四六、八二改訂時のそれは五三・三九)。

さらに、農業科目は生産科目を多く編成し、生産実習を重視してきた。これが農業高校としての本校を支えてきた。「どんな実習でも進んでやる子」を育て、求人を訪れる企業主からは「責任感が強く、対人関係を大切にすると、他校と異なる評価を受けてきた。

しかし、ある委員からは、「自宮を目指す生徒は農業大学校などへ進学し、即自宮は非常に少ない。生徒の多くは他産業に就職しているのに、それでも農業教育は必要なのか」と、本校における農業教育の役割について、鋭く指摘された。

議論の結果、「経済効率最優先の時代だから、経営規模が拡大すれば農業人口が減少するのは当然だ。農高卒と自宮を直結する考えは破綻する。農業関連産業の間口も狭く就職も難しい。産業ベースのみに乗る農業教育はもたない。農業教育をどのような視点でとらえ直すか」が問われているとし、今後の農業教育を次のようにとらえた。

〈農業高校のもつ役割について〉

① 将来の農業自宮者を含め、地域の産業を支え、発展させる人材を育成する。

② 国民の一人として、農業生産をおして農業を理解し、農業が好きな生徒を育てる。営みは、農業高校しかできないこと。

〈農業のもつ教育力について〉

① 生物の生命力を肌で感じ、それ故自らすすんで学習しようとする内容を持っていること。

② 困難な実習を体験するなかで、自分の限界を乗り越える体力と精神力を養い、自信を持つことが出来ること。

このような農業教育のもつ教育的意義に確信を深め、学科改編については、次のような基本的な視点を明らかにした。

① 生物を育て、農業を学ぶことが好きで、希望して生徒が入学する学校・学科づくりであること。

② 学科の整理統合を図ることによって、二・三次以降、すすんで学べる専門科目を幅広く選択できるコースを設け、生徒に多様な進路を保障すること。

③ 農業に興味や関心を持ち、好きになり、やってみようとする気持ちを育てるため、地域の農業諸団体との連携を図り、外部講師を積極的に取り入れた授業を展開すること。

そこで、従来の農業科・畜産科（後に、県教委の要請で園芸科が加わる）を統合して「生産技術科」とした。そして、作物生産・動物資源・生産工学の各コースを設定した（園芸科も加わったことから、作物生産・緑地環境・野菜果樹・草花・バイオテク・動物科学と変更）。さらに、どのコースからも大学進学が可能と

なる教育課程を編成した。

ちょうど時を同じくして、生徒数の急減や産業構造の変化に対応する新しい高校教育の在り方について検討する「高校検討委員会」(県教委主催)が、今後の職業教育の在り方として、「生徒の選択の幅を拡大する観点にたつて、既設の小学科を系統別に統合し、専門教育に関する基礎的・基本的な知識を幅広く学習する学科あるいは……、特色ある学科への転換を図り、生徒の多様な進路希望に積極的に対応する必要がある」とする提言をまとめた(一九九二年三月)。

この報告は、新発田農業高校で検討した将来像と期せずして一致を見た。生産学科を統合してコース別に分かれる「生産技術科」が、のちに高田農高・長岡農高・加茂農林高に、それぞれ波及していくことになる(実際は、県教委は強引に生産に関わる学科統合をすすめた。将来、生徒減に合わせて学級規模縮小のテコにすることも考えられる)。

こうして、九四年度から、新しくスタートした生産技術科は、その後「生産技術科の現状と問題点」(農業教育研究誌三十号)などを参考に、コース選択した生徒の反応をみると、以下のようなになる。

〈コース選択による利点と課題〉

- ・従来の学科間格差がなくなったこと。
- ・一年次の農業基礎・総合実習は二年次以降の選択を見極める意味もあり、真剣さがみられる。

- ・コース別に分かれる二年次以降は、当初自ら選んだコースに、学習意欲を持つものの施設設備の不十分さ・維持管理を優先する総合実習の在り方などに問題点を含み、継続的に生徒の意欲をそそる手だてが教師側に求められている。
- 以上、足掛け三年にわたって検

〈コース制に対する生徒の評価〉

95.12.18 アンケート調査

コース	満足	まあ満足	やや不満	不満	不明	合計
作物生産	8	7	0	1	1	17
緑地環境	8	12	0	0	0	20
野菜・果樹	6	11	9	3	4	33
草花	7	14	11	2	2	36
バイオク	6	12	5	2	0	25
動物科学	3	7	4	0	0	14
計	36	63	29	8	7	151
%	70.9		24.5		4.5	100

討した結果の「コース制」の生産技術科の開設は、中間的な報告として、生徒の「満足・やや満足」が七〇%以上の反応を得ている。「不満・やや不満」が二〇%を超えていることや、この春（九七年）第一回の卒業を迎える生徒の進路状況も検討課題である。

ところで、普通学科とも、職業学科とも異なる総合学科が、第三の学科として、九四年度全国七カ校に設置された。

現在、普通科は大学進学のため、職業科は就職のためとされている。しかし、普通科の生徒の中には、学習目的も不鮮明で、卒業後の進路も不明確な生徒が多く、職業科にも不本意入学のため、大量の中途退学者を出している。高校に進学したいが明確な目標や目的がもてない生徒のために、高校三年間のなかで、自分の進路を見つけることができる学科として、新しく総合学科が設置された。

こうした生徒を受け入れる総合学科の教育の特色として、将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習科目の開設や、個性を生かした主体的な学習をすすめるために、生徒が主体的に選ぶ科目として、総合選択科目群を開設している。

この総合選択科目群の一つである「生物生産科目群」は、従来の農業科に準じた専門科目を編成している。そこで、十日町総合高校を例に、「生物生産科目群」と農業教育との関係について、次に考えてみたい。

三、総合学科と農業教育

(1) 十日町総合高校の総合学科と農業教育

十日町実業高校は、九四年度から改組（従来の農業科・染色化学科・繊維工学科・家政科・被服科を廃止）され、新たに総合高校として、人文科学・自然科学・健康福祉・生物生産・メカトロニクス・アパレルデザイン・ビジネスの計七つの総合選択科目群を開設した（五クラス二〇〇人）。

職場では当初、地元産業界の要請もありコース制の意見が強く出たが、地域的に普通科志向が強く、さらに、これまで施設・設備で冷遇されていたのが、総合学科の設置により予算や定員などで優遇されるという期待感が教師の心を揺さぶり、農業科について言えば農業後継者が数%に過ぎなかったことなどが、総合学科へ転換した背景となっている。

(2) 科目群と農業教育（農業自営者養成）とのかわり

総合選択科目群は、系列とせず七つの科目群とした。それは、途中の科目変更が困難になること、自分の興味関心のある科目を幅広く選択出来るという総合学科の趣旨からはずれるからである。従って、科目群の教科内の選択にこだわらず、他の科目群からも選べる自由選択制とした。

これは、文部省が「総合選択科目群は、『科目』の選択であるという点で、コース制と異なるものであり、生徒が特定の総合選択科目群に所属するものではない」としているからである。

十日町総合高校では、将来の農業従事者を想定し、総合選択科目群の一つとして、農業科のカリキュラムに準じた「生物生産科目群」を開設したが、生徒が主体的に選んだ科目と人数は次のような結果となった。

一年次生物生産科目群の「生物生産基礎」を選んだ十七人が、二年次に「栽培環境」を選択しているが、他の科目および三年次の科目は、二、五人しかいない。しかし、食品加工・園芸・野菜などの科目には二桁以上の生徒が選択している。

95年度入学生の生物生産科目群の選択

学年	単位数	科目	人数	学年	単位数	科目	人数
1	2	生物生産基礎	17	3	4	園芸	15
2	4	生物	2			野菜	11
		畜産	0		4	生物生産実習	5
		測定	0			造園施工管理	2
		2	生物工学基礎		3	4	食品加工
	農業水利		3		4	農業経営	2
	2	栽培環境	17		4	農業機械	3
3	4	4	生物工学		2		
			農業土木施工		0		
	3	課題研究	31				

将来の進路保障を考へて科目選択する場合は、同じ科目群から選ぶように指導しているものの、生徒は必ずしも同じ科目群から選んではいけない。生徒は、将来の進路より興味・関心に基づいて選択しているからである。だから、将来どんな職業を選ぶか不明なので、生徒に職業人としての夢を語れないという。

農業に関わる各学科の農業教科・科目は、基礎的科目、実験実習科目、中核的科目、補完・深化的科目で構成し、配列されている。つまり、教育内容に順次性や系統性が配慮されて科目を組織しているのだが、この生物生産科目群の農業科目の生徒の選び方によって、全く無視されてしまう。

特に、私たち農業教員にとって真剣に受け止めねばならないのは二八〇人の入学者のうち、生徒たちに自由を選択させると、生産科目群から農業科目を選択する生徒は多くて一割、ほとんど数%であるという事態である。

一方、農業教職員が要求した食品加工室、バイオテックの施設は新しくできたが、全体として校舎の改築・増築がなされず、教職員加配も不十分であるという。

四、まとめにかえて

新発田農業高校のそれまでの生産学科であった農業・園芸・畜産の各科を、生産技術科に統合した試みと、農業科併設から総合学科へと切り替えた十日町総合高校の例から、今後の農業教育をすすめていくうえで、二つの重要な課題が提起されていると思う。

その一つは、生産学科を統合し、コース制とした試みの成否が、二年次以降、農業そのものが好きになり、将来やってみようとする生徒を育てる農業科目の学習をどう展開するにかかっている、ということである。「新しい酒は、新しい革袋に盛る」といわれるように、新しい制度は、これにふさわしい教職員の意識と実践が要求される。さらに、生徒のコース制の不满には、教職員の人数配置と施設・設備が不十分との声が多い。生徒の学習意欲を萎えさせてしまう原因に、新潟県の教育予算の貧弱さがここでも指摘されなければならぬ。

二つ目は、一見生徒の主体性を尊重しているかに見える総合学科の生物生産科目群が示すように、生徒の関心や興味に応じて、教科科目をバラバラに選択する

ことで、教育内容の系統性や順次性が全く無視されることである。総合学科は、戦後の民主的な高校教育をその基本から解体するといわれる所以である。

農業になかなか顔を向けられない現状だからこそ、県内における農業後継者をどう育てるかに関わって、生徒にとってその気になる農業に関する知識・技術・技能を、学年や心身の発達にに応じて、意図的に系統的にしかもていねいに教えられる必要がある。

深刻さを増す後継者不足から、九六年度から農林水産省の助成事業として、全国農村青少年振興会が、都市の他産業従事者が働きながら農業について学べる「就農準備校」を開設し、積極的に就農できる機会を設けた。農林水産省の調査で、農外から新規参入した人の就農時不安について聞いたところ、「農業技術が未熟」が五八％とトップを占めた（九五年三月）という。農業県である新潟の農業高校が果たす役割はますます大きいといわねばならない。

（うちやま ゆうへい 村上桜力丘高校）

